

ひとり親団体が自発的に創設される仕組みとは何か

1180427 小松 稔明
高知工科大学 マネジメント学部

概要

現在、ひとり親家庭での子どもの虐待などの問題が増加している。その背景として、ひとり親が経済的に不安定であることや、孤立していることが指摘されている。したがって、ひとり親をたち同士が交流する機会や場が必要である。しかし、ひとり親を支援する団体のある県とない県が存在しており、ない県のひとり親はサポートを受けられず苦しい思いをしている。本研究では、しんぐるまざあず・ふぉーらむ・福岡の事例を取り上げて、ひとり親団体を創設する際に生じる社会的ジレンマが自発的に解決されるための仕組みを考察する。

第1節 はじめに

1-1 動機

現在、社会的孤立などの要因から、ひとり親家庭での虐待が大きな問題となっている。社会的孤立の解消のため、近年では多くの都道府県でひとり親が交流する機会や場を提供する団体が増え始めた。しかし、ひとり親を支援する団体が一つも存在しない都道府県が存在する。団体の存在しない都道府県の場合は、市役所などの公的な機関に相談することが多いが、その相談窓口で対応する職員は必ずしもひとり親の家庭で育った方ではないため、ひとり親への理解が薄いことも少なくない。以上のことから、同じ境遇の理解者の集まるひとり親団体が各都道府県にできる限り多く存在する必要がある。また、ひとり親団体が自発的に創設される環境があれば、団体が必要な地域の人々が自ら判断し適切な地域に団体が創設される。さらに、行政が地域の実情を把握し団体を創設する際と比べ行政のコストも削減されるだろう。そこで、本研究ではしんぐるまざあず・ふぉーらむ・福岡の事例からひとり親団体を自発的に創設することが困難であることを明らかにし、団体を自発的に創設させるためにはどのような支援が必要かを考察する。

1-2 本論文の構成

第1節では本研究の動機、背景、目的を明確にする。第2節では関連研究を述べる。第3節では研究方法について説明する。第4節では母子寡婦福祉連合会の高知県と福岡県の母子会数を比較する。そこから、第5節では

ひとり親団体創設時に起こる社会的ジレンマについて考察し、しんぐるまざあず・ふぉーらむの事例を通じてそれが解決される仕組みを検討する。第6節では結論、第7節では今後の課題を述べる。

1-3 背景

1-3-1 ひとり親家庭の現状

ひとり親家庭であることは、虐待の大きな要因であることに加え経済的困難や孤立、就労不安定にもつながっている(表1)。2013年にはNHKのクローズアップ現代でも、「父子家庭急増の影で～虐待死事件の波紋～」というタイトルで、5歳児の子どもが服を着替えるのに手間取ったことに対し父親が腹を立て、暴行を加え死亡させた事件が取り上げられている。このニュースなどから、ひとり親家庭で虐待が問題になっていることが世の中からも注目された。

家庭状況	あわせて見られるほかの状況上位3つ				
	件数	割合(%)	1位	2位	3位
一人親家庭	460	31.8	経済的困難	孤立	就労不安定
経済的困難	446	30.8	一人親家庭	孤立	就労不安定
孤立	341	23.6	経済的困難	一人親家庭	就労不安定
夫婦間不和	295	20.4	経済的困難	孤立	育児疲れ
育児疲れ	261	18.0	経済的困難	一人親家庭	孤立

参考) 中嶋(2012)の表1 (東京都福祉保健局「児童虐待の実態II」2005) より筆者作成

現在はひとり親家庭を支援する、多くのNPOや行政が積極的に虐待の防止に動き始めている。代表的なもの

しては、ひとり親家庭を支援するひとり親団体が挙げられる。しかし、ひとり親家庭が存在しているにも関わらず、ひとり親団体が存在しない地域がある。どの地域のひとり親家庭もひとり親団体の支援を求めており、孤立などを改善するにはひとり親団体の存在は重要である。

1-3-2 ひとり親団体について

ひとり親団体とは、ひとり親家庭に対してサポートをしている様々な団体のことを指す。団体によって、サポート内容や団体を利用する年齢層も違うため、目的に応じて各団体を使い分ける必要がある。

代表的な団体としては、しんぐるまざあず・ふぉーらむ（全国に支部がある）が挙げられる（図1）。この団体は歴史のある団体で、「シングルマザーズ」というタイトルでドラマや演劇にもなっている。他にも、リトルワンズ（東京中心）は他の団体に比べ歴史の短い団体であるが、実績が多い。集まる母親は若い人が多いのが特徴である。キッズドア（東京・東北中心）は、主に子供の学習などを支援する団体である。全国母子寡婦福祉団体協議会は元々、戦争で夫を失った女性たちをサポートする団体であったが、現在は幅広くひとり親をサポートしている。各都道府県・指定都市に所在する56の母子福祉団体が加盟しており、さらにその下に各地域の母会が存在している。ほとんどの県に支部があるのも特徴である。本研究ではしんぐるまざあず・ふぉーらむ・福岡に焦点をあてる。

しんぐるまざあず・ふぉーらむ



引用元：

<http://www.joyful-life.jp/csr/smf.html>

リトルワンズ



引用元：

<http://mother.pre-share.com/>

キッズドア



引用元：

<https://jp.stanby.com/ats/870116057556201473/jobs>

全国母子寡婦福祉団体協議会



引用元：

<http://zenbo.org/index.html>

(図1) ひとり親団体のロゴ

1-4 目的

ひとり親家庭は就労不安定による経済的困難、社会的孤立などの要因から不安を抱えている。その不安を解消するには、同じ境遇の家庭の人たちと悩みを話し合うことが重要である。しかし、ひとり親は毎日終日働いており、同じ悩みを持つひとり親たちを日常生活で探すこと

は困難である。だが、その問題はひとり親団体が存在すれば解決することができる。そこで、ひとり親団体が自発的に創設されるために必要な仕組みを考察することで、ひとり親団体の創設を促し、世の中のひとり親家庭を少しでも支援できればと考えている。

第2節 関連研究

筆者はひとり親団体の先行研究について調査したが、以下のようにひとり親家庭の現状、特に経済面に焦点をあてて記述するものが中心であり、ひとり親団体に関するものは見い出せなかった。

2-1 ひとり親家族と社会的排除

ひとり親家族と社会的排除については、神原 (2007) が研究している。ひとり親家族の生活困難な現状を既存のデータにより明らかにし、経済生活に焦点をあてて、「なぜひとり親家族の多くが貧困なのか」という問題を考察している。そのうえで、ひとり親家族の生活困難な状況について、社会的排除アプローチに依拠して検討するために、「社会的排除」という概念を明確にするとともに、ひとり親家族を排除するメカニズムについてモデル化し、ひとり親家族を包摂する施策を提案している。

2-2 子どもをめぐる貧困と虐待

子どもをめぐる貧困と虐待については中嶋 (2012) が研究している。虐待と経済的要因の関係やひとり親家庭の現状を明らかにし (表2)、わが国の今後の対策を提案している。さらに、イギリスの政策を踏まえ、貧困の根絶に必要な教育支援、就労支援、保育支援、財政支援など包括的な政策の重要性についても述べている。

	全世帯	母子家庭	一般世帯を100とした場合の母子世帯の平均収入
平成14年	589.3万円	212万円	36.0
平成17年	563.8万円	213万円	37.8

参考) 中嶋 (2012) の表2 (厚生労働省 (2006) 「全国母子世帯等調査結果報告」) より筆者作成

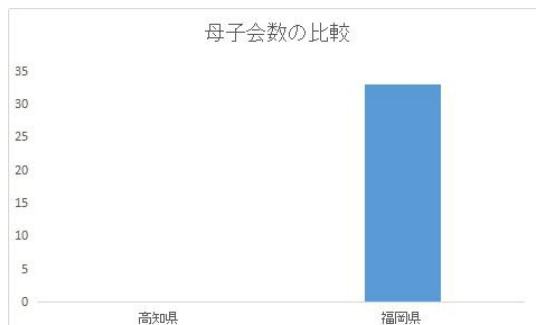
第3節 研究方法

本研究では福岡県のしんぐるまざあず・ふぉーらむの事例研究を行う。高知県に母子会が存在しない一方、福岡県には多数存在している。団体数について筆者が文献調査を行い、しんぐるまざあず・ふぉーらむ・福岡に直接電話をかけて、職員から聞き取りを行った。

加えて、インターネットの情報からひとり親団体数の多い県のNPO法人などの団体創設の背景を探る。

第4節 母子会数の比較

図2は高知県と福岡県の母子寡婦福祉連合会の母子会の数を比較している。高知県には母子会が全くない一方、福岡県には33の母子会が存在している。そのような全国的に組織があり歴史のある団体でも高知県では後継者不足により解散した。高知県で現在団体を創設しようとする場合、戦後のように大勢の人が一斉に同じ目的を持って団体創設に動くきっかけもないため、困難を伴うと考えられる。



(図2) 高知県と福岡県の母子会数の比較

筆者作成

第5節 ひとり親団体創設時に起こる社会的ジレンマ

ひとり親団体の創設には、社会的ジレンマが生じていると考えられる。一人で団体を創設しようとした場合、時間や労力などの多額なコストを払う必要がある。よって、自らの利得の最大化を考えたとき、団体の創設に手を上げるより、創設しないほうが利得が大きくなる。しかし、ひとり親家庭全体としては、ひとり親団体が存在

する状態と存在しない状態を比べれば、前者のほうが利得は高い。このことを全家庭が分かっているながらも、誰も手を挙げず、ひとり親団体が創設されないという状態に陥るのである。

そのような社会的ジレンマ状況にも関わらず、なぜ福岡県にはひとり親団体が創設されたのだろうか。福岡県には、第1節で触れたしんぐるまざあず・ふおーらむ・福岡が存在している。その創設の経緯を分析し、どのようにすれば団体が創設されるのかを考察する。

5-1 しんぐるまざあず・ふおーらむ・福岡創設までの歴史

しんぐるまざあず・ふおーらむ・福岡は、前身は児童扶養手当の改正を機に集まった集団であった。その後、東京のしんぐるまざあず・ふおーらむが特定非営利法人化したことを機に福岡の集団もNPO法人化し、しんぐるまざあず・ふおーらむ・福岡が創設された。

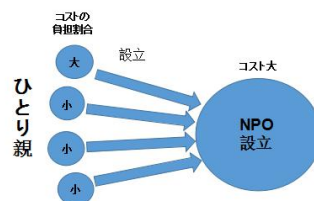
5-2 法人のコミットメントデバイスとしての役割

団体を創設する際に法人という形をとることも重要だと考えられる。なぜなら、単なる団体であることと比べ法人という形をとることによって、毎年、計算書の提出などの必要が出てくる。よって、よりひとり親の支援にコミットすることへつながる。普通の団体であれば簡単に解散などが可能だが、法人という形をとることで解散や抜け出すことが困難になる。よって、コミットメントデバイス（行動を縛り付ける装置）として働いていると言えよう。

5-3 法人化する際の困難性

しんぐるまざあず・ふおーらむ・福岡への聞き取りから、団体を法人化する際は、お金はかからないものの、時間と労力というコストがかかることが明らかになった。法人化する際は実際の登録の手続きとなると全員に均等に仕事を分けることは難しいので、特定の職員に仕事が集中しがちである（図3）。その職員は自分の普段の仕事もあることから、その中で手続きを行うのは非常に大

変である。一人で創設するのに比べて複数のメンバーが集まっているのであれば、社会的ジレンマが部分的には解決されるものの、完全な解決には至らないと考えられる。



(図3)福岡県に団体が創設される仕組み（筆者作成）

第6節 結論

今回調査した福岡県は、ひとり親に対してすでに深く考えているしんぐるまざあず・ふおーらむ・福岡というNPO法人があり、ひとり親のメンタルケアやひとり親家庭の環境改善に取り組んでいた。しかし、すでに設立されている同じ境遇の理解者の集まる、ひとり親団体が存在しない高知県などの地域では、行政のサービスしかなくひとり親の悩みは解決しにくい状況である。

このことから言えるのは、団体の無い地域にはひとり親が団体創設をする際の手続きなどの負担を減らすなど、ひとり親が低コストで団体を創設できるような環境を行政が構築することが重要だということである。

第7節 今後の課題

本研究では、福岡県のひとり親団体について聞き取り調査を行ったが、これとは別に全都道府県でのひとり親団体数と、そのひとり親団体の取り組みなどの聞き取り調査を行えば、本研究の知見の一般性を確認することができよう。

謝辞

本研究を進めるにあたり、ご指導を頂いた卒業論文指導教員の肥前洋一教授に感謝致します。また、聞き取り調査にご協力頂き多くの知識や示唆を頂いたしんぐるまざあずふおーらむ・福岡、職員様に感謝します。

参考文献

神原文子 (2007) 「社会的排除と家族 一人親家族と社会的排除」 『家族社会学研究』 18 卷 2 号 11-24 頁

中嶋裕子 (2012) 「子どもをめぐる貧困と虐待-イギリスの施策から学ぶ-」 『社会事業研究』 51 号 128-132 頁